【論　　文】

なぜフロイトとユングは訣別したのか
― 二人の往復書簡の分析 ―

中　野　明　徳

【要　　旨】

ユングはフロイトに接近し、フロイトはユングが精神分析の後継者になることを期待したにもかかわらず訣別した。二人の往復書簡を詳細に分析すると、ユングの接近にも訣別にも関与する女性患者であり精神分析家になったシュピールラインの存在が明らかになる。フロイトと訣別後、方向を見失ったユングに、彼女は創造の世界に導くという「アニマ」の役割を取り、ユングの新しい心理学に貢献したと考えられる。

【キーワード】

フロイト　ユング　精神分析運動　アニマ　創造の病

Ⅰ．はじめに

臨床心理学を切り開いたパイオニアにフロイト（Sigmund Freud, 1856–1939）とユング（Carl Gustav Jung, 1875–1961）がいる。ユングはフロイトよりも19歳ほど若く、フロイトが創始した「精神分析」の価値を積極的に認めて接近し、フロイトはユングが自分の後継者になることを期待するまでになったが、1913年に訣別した。この理由を検討するために、『フロイト／ユング往復書簡集』（1974）を分析した。ユングは当初これを公表する意思はなかったが、公開は自分の死後に指定した。フロイトのフリース（Wilhelm Fliess, 1858–1928）宛の書簡はすでに公刊されていた（Freud, 1950）。フロイトの息子エルンストは書簡の公開に積極的で、1970年２月ユングの息子フランツと会い、早期に公開することに同意した。フロイトの娘アンナ（Anna Freud, 1895–1982）がこの書簡の公開に同意したのは、父がユングに失望したのを見て精神分析の将来を特定の人に託さないためであった（中野, 2021）。

この往復書簡は1906年４月（１F）から始まり1923年（359J）で終わり、フロイトの発信164通、ユングの発信196通、計360通からなる。この書簡に二人を繋ぐ女性として、シュピールライン（Sabina Spielrein, 1885–1942）が登場する（４J, 35J, 133J, 143F）。彼女はユングの患者であったが、医師となり精神分析家にまでなったユダヤ系ロシア人である。カロテヌート（Carotenuto, 1980）は彼女の1909年から1912年にかけての日記と手紙から、三者の関係を『秘密のシンメトリー』（邦題）として公刊した。さらにリッヒェベッヒャー（Richebächer, 2005）は彼女の生涯を詳細に調べ、『ザビーナ・シュピールラインの悲劇』（邦題）として公刊している。

Ⅱ．カール・グスタフ・ユングについて

ユング（1962）の『自伝』（邦題）は秘書ヤッフェによって1957年から口述筆記され、彼の死後に刊行された。ヤッフェは「本書は彼の個人的な神の体験を述べている唯一の場所である」という。ユングはプロローグで「私の一生は、無意識の自己実現の物語である。無意識の中にあるものはすべて、外界へ向かって現れることを欲しており、人格もまた、その無意識的状況から発達し、自らを全体として体験することを望んでいる」と述べる。（以下、下線は筆者による。）

１．ユングの家族的背景

父パウル・ユング（1842–1896）はヘブライ語とアラビア語が得意な哲学博士で、教授になるのが夢であったがプロテスタントの牧師になった。祖父カール・グスタフ・ユング（1794–1864）はバーゼル大学医学部教授、学長になった傑出した人物であり、ユングはこの祖父の名前を受け継いだ。祖母ゾフィー（1812–1855）はバーゼル市長の娘で、祖父カールの３番目の妻となってパウルを生んだ。母エミーリエ（1848–1923）はバーゼルで有名な牧師長ザムエル・プライスヴェルクの娘である。ザムエルは透視力をもち、母と母方祖母は霊能者であった（林, 1998）。

２．幼年時代

カールは1875年７月26日に、スイスのボーデン湖畔ケスヴィル村で生れ、牧師の息子として田舎で過ごした。カールは２，３歳から記憶があり、1878年頃母が数カ月バーゼルの病院で過ごした時、母より20歳年上の伯母の世話になって以来、「愛」という語に不信感を抱き、「女性」で連想する感情はあてにならない、「父」は信頼感と無力さを意味した。カールの面倒をみた女中について、「まるで私だけに属しているようだったし、彼女は私に理解できない神秘的な事柄と関連があるようだった」と述べ、このタイプの女性が後に彼の「アニマ」（男性の無意識にある女性的な性質が人格化されたもの）の一側面になった。

特筆すべきは夢で、地下に潜ると、高さ４～５メートル、太さ50～60センチ、皮と裸の肉でできている怖いものが玉座にいるのをみた。ずっと後になってファルロス（陰茎）だったとわかった。これは地下の神に思われ、誰かが主イエスについて強調して話すときにいつも現れた。

３．学童時代

カール９歳の時、妹ゲアトルートが生まれる。11歳の時、バーゼルのギムナジウムに入り、田舎の仲間と別れた。主イエスに対して肯定的な態度を取ることが次第に不可能になった。学校は退屈で、神学の授業は面白くなく、数学は苦しいものであった。12歳は致命的な年で、カールはある少年から突き倒され、その瞬間「もう学校に行かなくてよい」という考えがひらめき、半年以上、学校を休み森や川に出かけて「神秘の世界」に没頭した。

18歳の時、父と神について議論を戦わせたが、不満足な結果に終わった。カールは自分が２人の人物であることを知っていた。第１人格は両親の息子で通学し、勤勉でも、礼儀正しくも、身ぎれいでもなかった。第２人格はおとなで、疑い深く人を信用せず、人の世からは疎遠だが、自然なかでも夜、夢、「神」が浸透していくものすべてと近い。人格No１とNo２との間の対抗的動きは全生涯に及び、No２人格は生涯に通じて最も重要であり、常に内部から来ようとしているものにその余地を与えようとしてきた。

４．学生時代

カールは科学への関心が高まってきたが、ときおり哲学書に立ちもどり、考古学者になりたいと思った。No１と No２とが格闘していた頃みた「大きな黒い人影が自分を追っかける」夢は重大な啓示で、No１は光の運搬人、No２は No１に影のように従っていた。この夢から世界観が変わり、No２が夢の創造にかかわりがあり、自分はますます No１と同一であると感じたが、包括的な No２の一部分にすぎないとわかった。No２は化け物であり、暗闇の世界に抗して自らを保つことができる霊（スピリット）を意味し、自律的な人格を獲得していた。

1892年から1894年まで、カールは宗教について父と議論をたたかわしたが、実りがなかった。1895年の春、カールはバーゼル大学医学部に入学した。その年の秋、父は床に伏し1896年の初めに亡くなった。臨床の学問は忙しかったが、日曜日はカントやニーチェを読み、『ツァラトゥストラはかく語りき』はニーチェの No２だと思った。1898年から、カールは医者としての生涯を真剣に考えるようになり、15歳の少女を霊媒とする降霊会に出席し、これを博士論文「いわゆる神秘現象の心理学と病理学」（1902）にまとめた。当時の精神医学は面白くなかったが、クラフト＝エビングが精神病を「人格の病」と呼んでいるのをみて、カールは感動した。これは彼が探していた、生物学的および精神的事実に共通の場であった。

５．精神医学的活動

1900年12月10日カールはチューリッヒにあるブルクヘルツリ精神病院の助手に就いた。オイゲン・ブロイラー（Eugen Bleuler, 1857–1939）が1898年に院長に就任していた。カールの関心は「いったい何が実際に精神病者の内面で起こっているのか」であった。1903年カール（28歳）はエマ・ラウシェンバッハ（21歳）と結婚した。1905年にカールはチューリッヒ大学精神科講師になり、1913年まで続けた。1904年から1905年にかけて、カールは実験精神病理学の研究室を設立して言語連想を研究し、論文をアメリカの雑誌に発表した。研究仲間にルートヴィッヒ・ビンスワンガーがいた。カールはフロイトの『夢判断』（1900）を読んで、夢分析が統合失調症の表現形態に貴重な光を投げかけていることを見出した。

Ⅲ．フロイトとユングの関係とシュピールライン

１．往復書簡の始まり（1906年４月）

往復書簡は、ユングがフロイトに『診断学的連想研究』（1906）を寄贈したことのお礼から始まる（１F, 1906年４月11日）。フロイト（50歳）はユングを「親愛なる同学の士」（Sehr geehrter Herr Kollege）と呼び、ユング（31歳）はフロイトを「親愛なる教授」（Sehr geehrter Herr Professor）と呼ぶ。ユング（２J, 1906年10月５日）は、「あなたの観察方法を習熟したい」と述べる一方で、「ヒステリーの起源が性のみに依存しているとは言えないと思う、あなたの性学説に対しても疑義をさしはさむ者である」と自分の立場を示す。フロイト（３F, 1906年10月６日）は、「いつの日かあなたがもっと私見に接近いただけるものと、期待を断念しないでお待ち申し上げる、原則は貫かねばならない」と返す。

ユング（４J, 1906年10月23日）は、あるヒステリー患者を治療中で、病歴６年、20歳なるロシア人女子学生の厄介な症例について意見が欲しいと述べる。この患者がザビーナ・シュピールラインで、次のように記載している。「最初の外傷は３歳と４歳の間のころ、父親が彼女の兄のむき出しの尻を叩くのを目撃した折に強い印象を受け取り、父の手を借りて排便を終えたのちにきまってその事件を思い出すようになった。４歳から７歳にかけて、父の手をわずらわさずに排便

しようとして、次のような試みを無理に行った。まず一方の足に上体をのせて床にすわり、かかとの部分で肛門を圧迫したため、排便を行おうとする当初の試みが逆に排便を妨げる結果になった。どうかするとこの方式を彼女は２週間も便器で繰り返し取り続けた。どうしてこの異様な仕様が身についたのか、彼女はわからない。それは完全に欲動に駆り立てられるごとく、おののくような悦楽感を伴っていた。やがてこの現象は、激しいオナニーへと移行した。」フロイト（5 F, 1906年10月23日）は、この症例は父に向けられたリビドーの幼児性固着、対象選択の典型的な症例で肛門期自体愛であろうと述べる。

ユングは1906年12月『早発性痴呆の心理』を刊行しフロイトに送った。同書まえがきで、ユングはフロイトの天才的な概念に感謝を捧げているが、幼児の性的外傷がもっぱら重要だと認めたわけでないし、性に心理学的普遍性を与えることを意味しないと述べる。同書第２章「コンプレックスと心に対するその作用」で、「ある若い女性は、マントを叩くと出るほこりを見るのが耐えられなかった。この風変りな反応は、彼女がマゾヒズム的性質をもっているせいであった。この素質は、子どものとき彼女の父親が彼女のお尻にしばしば体罰を加えたために生じた。この体罰のために性的興奮が呼び起こされた」とある。これはシュピールラインであろう。同書第３章「連想に及ぼすコンプレックスの影響」では、友人Ｘが見た「疾駆する馬の夢」が掲載されているが、ユング（９J, 1906年12月29日）は、Ｘがユング自身であることを認め、曖昧かつ不法な性的願望を秘めていますと述べる。フロイト（11F, 1907年１月１日）は、ユングの著書をウィーンの弟子と比べて対等であると高く評価し、私たちの性格並びに立場の違いに従って役割を分担するのが良策ではないかと述べて、ウィーン訪問を提案する。

ザビーナ・シュピールラインの入院と経過

リッヒェベッヒャー（2005）によれば、ザビーナの父ナフトール・モスコーヴィチ・シュピールライン（1861年生れ）はワルシャワのユダヤ人農民の息子として生れた。父は外国語が得意で、ドイツの農学校を卒業し、ワルシャワの化学肥料会社で働き財産を築いた。ワルシャワからコーカサスの入り口にあるロストフ・ナ・ドヌーに移り住んだ際に、自分をロシア人として自覚しニコライ・アルカジェヴィッチと改名した。母エヴァ・リュブリンスカヤ（1863年生れ）はロシア南東部のユダヤ人居住地エカテリノスラーフ在住のラビの娘として生まれた。エヴァの経歴は型破りで、キリスト教系のギムナジウムに通い、帝政ロシアの大学に入学した最初の女性の一人で、医学部の歯学科で学び、ハシディズム（ユダヤ教敬虔主義）の伝統を守った。

ザビーナは両親の最初の子で1885年10月25日生れ、乳児期、しつこい便秘に悩まされ、食事を切り替えても症状は治まらず、とにかく病弱であった。弟にヤーン（1887年生れ）とイサーク（1891年生れ）、妹エミーリア（1895年生れ）がいる。ザビーナが両親に反抗や口答えをしておしおきを受ける時、四つん這いになってスカートをたくし上げ、父親がむきだしの尻を叩いた後、父親の手にキスをしなければならなかった。次第に彼女は排便を我慢した。

1896年ザビーナはギムナジウムに入学した。父の計画は子ども全員が最高の大学で学ぶことであった。父親と浪費家の母親とはいさかいが絶えず、ザビーナは祖母から守られ癒されたが、1900年祖母が死亡、1901年妹が亡くなり、あらゆる人から距離を置くようになった。ザビーナは1904年ギムナジウムを卒業したが、家族とコミュニケーションを取らなくなり話しかけられると支離滅裂となったり、チック症状がでたり、しかめ面をしたり、両手を前ではたいたりした。こうした自宅での行動と対照的に学校では正常であった。彼女は医師になりたいという希望があったが、当時のロシアでユダヤ人女性が大学に入学できる見込みはなかった。

両親は娘を救う医者を西欧で探そうと決心した。1904年夏、母親は兄と共にザビーナを連れて

スイスに向けて旅だった。スイスのイメージは心身が健康になる場所であった。1904年８月17日の晩、ザビーナは混乱しブルクヘルツリ病院に緊急入院した。翌朝ユングは既往歴を聴取したが、ザビーナの状況をすぐにイメージできなかった。父親について「神経質、働きすぎ、神経衰弱、怒りの発作が起きると最後は正気を失う」、母親について「ヒステリック！神経質（患者と同様）、歯科医、子どもじみたヒステリーによる失神あり」と記載している。

ザビーナが入院中、３つの異なる転移を見せた。最初の転移は、ひたすら混乱したものだった。他の医師の指示に従わなかったが、ユングがよく言って聞かせると静かになった。ザビーナは病院の環境になじんでいくなかで医学に関心を持ち、ブロイラー教授による症例報告会や院内の心理学研究室の活動に参加できるようになった。病院内で評価されて自己肯定感を高めることができた。ここからサド・マゾ的な性格をもつ父親転移がユングに向き、彼をテストするようになった。裏切られると報復し、病気が治るという保証をされると読書は数時間にも及んだ。ユングはザビーナに言語連想法を行い、彼女の「主要コンプレックス」は折檻された体験とした。

1904年の末から、ザビーナはユングの教授資格論文の執筆作業を手伝い、２人の間で多くの会話がなされた。この時期ユング夫妻が病院内の官舎に引越し、12月26日にユングの娘アガテが生まれ、ザビーナは激しい興奮状態に陥っている。このあたりからザビーナ（19歳）の転移は第３段階に入り性愛的性格を持つようになった。12月末ベルリンのカール・アブラハムが医長として赴任してきた。1905年４月ザビーナはチューリッヒ大学に入学を申請する。ザビーナは入院中であったので、ブロイラー教授が「彼女は精神病ではなく、ヒステリー症状を伴う神経症を治療するために当院に入院している。それゆえ彼女の入学を推薦するものである」という鑑定書を作成した。ザビーナは４月終わりから講義を聴講し、1905年６月１日退院した。

２．ユングの第１回ウィーン訪問（1907年３月）

1907年３月３日ユング（31歳）は妻エマ（23歳）とビンスワンガー（26歳）を伴って、ウィーンのフロイトを訪問し、３月６日水曜会に出席している。訪問後、ユング（17J, 1907年３月31日）は「理解するのに至難な部分だったあなたの壮大な性欲概念も、今では細部にわたって咀嚼され、数多くの具体的症例において吟味中です」と書く。しかし、早発性痴呆の本質としての自体愛は、私たちの認識に抗いがたい印象をもつが、その限界が見極めていないともいう。ウィーンでの会合後、二人の一体感は強くなり、フロイト（18F, 1907年４月７日）は「私の研究を継続・完成してくれるのはあなたを措いて他はいない」と述べる。ユング（19J, 1907年４月11日）は「生身のあなたを知らなければ誰一人としてあなたの学問を完全に理解できないはずなので、お近づきできて自分でも驚くほど内面的な成長をとげたような気がする」と返事する。

ユング（35J, 1907年７月６日）は「レールモントの詩の１節が絶えず頭の中を去来すると、ある女性ヒステリー患者が私に訴えてきた」と述べるが、シュピールラインの名前は伏せる。以下にユングの言葉を続ける。「その詩とは籠の鳥を唯一の友としている虜について唄われたもので、その虜はいつの日かその生涯におけるもっとも崇高な行為として、なにか生あるものに自由を与えたいと願う、たった一つの願望に生きがいを賭しています。籠を開いて、愛してやまない小鳥を放してやります。患者の最高の願望は何だと思いますか。彼女は『私の人生で一度くらいは精神分析の治療によって、完全な自由を与えてやりたいのです』と言います。夢の中で彼女は、あたかも私で立証されたごとくに圧縮をおこなっています。というのは私から子どもを授かるというのが現実の彼女の最大の願いでありまして、それこそ彼女の満たされざる願望いっさいを満たすに違いないのだと認めているのですから。そのためには私は、さしあたって当然のことながら「小鳥を逃して」やらなければならないでしょう。（スイス系ドイツ人の間では、「お前の『小鳥』

もよく鳴いたのか」という言い回しは、セックスをしたのか、という意味)」

この後、ユングは1907年９月第１回精神医学・神経医学・心理学合同国際会議（アムステルダム）でフロイト説を擁護した。ユングの講演「フロイトのヒステリー理論」で紹介された症例はシュピールラインであった。

医学生ザビーナ・シュピールライン

1905年に医学生になったザビーナは洗練された女性に変貌を遂げ、二人が会っていたのはユングの講義のときだけであった。ザビーナにとって、ユングは指導者であり、親代わりであり、愛人であった。1907年初頭、チューリッヒ市立劇場でワーグナーの「ニーベルンゲンの指輪」が演奏され、ザビーナにとって宗教的な啓示であった。ユングとの間で作りたいと熱望していた子どもに「ジークフリート」という名前をつけた。1908年５月ザビーナは解剖学と生理学の試験をパスした。その頃のザビーナ（23歳）はユングと病院でも彼女の下宿でも会っていたが、まだ母親離れせず、ユングと会うたびに母親に最新情報を詳しく報告していた。

３．第１回フロイト心理学会議（ザルツブルグ）(1908)

フロイト（70F, 1908年２月27日）はユングに簡単で親しみを込めた「親愛なる友」（Lieber Freund）と呼ぶようになった。1908年４月27日、ザルツブルグで第１回フロイト心理学会議が開催され、ブロイラーを含めて42名が参加し、フロイトは「ネズミ男」の症例を報告した。ユング（33歳）はこの開催のために尽力した。1908年９月18～21日には、フロイトがブルクヘルツリのユングの住まいを訪問し、その後フロイト（110F, 1908年10月15日）はユングを「親愛な友にして後継者なる方」（Lieber Freund und Erbe!）と呼ぶ。ブロイラー夫妻がフロイト家を訪問して、幼児性欲を擁護したが、「性欲」という名称を取り替えたらどうかと提案した。1909年に発行予定の『年報』の監修者にフロイトとブロイラーの両名が記されることになった。

こういう中で、フロイトは音信が少しの間途絶えたことでユングに電報した。ユング（133J, 1909年３月７日）は目下のコンプレックスについて次のように書いた。この時、ユングは医長職の辞表を提出していた。「数年前私が最大限の努力を払って重症の神経症から救い出したさる女性患者が、考えられる限りの破壊的手段でもって私の信頼と友誼を裏切ってしまったためです。当の患者は、彼女の子どもを産みたいという願いをほかならぬ私が断念させてしまったため、忌まわしいスキャンダルを引き起こしてしまったのです。私は彼女に終始紳士的態度で接してきたのですが、私の手もまた汚れているのだといった感傷的な良心がいくらか敏感に働きすぎたのが障害になって、私の目論見がいつでも体面第一を考えるという理由でそれが一番自分を傷つける原因となってしまったのです。悪魔のいたずらは至高のものすらも不潔な虚構の道具に利用してしまいかねません。これまで自分の一夫多妻志向の成分についてきわめて不十分な観念しかもっていなかったと思い知らされ、夫婦の営みの機微について多くの問題を学ばされました。今では悪魔につけこまれないですむ方法と態度を理解するようになりました。」

フロイト（134F, 1909年３月９日）は交信量が減少するにつれて、フリース以来の外傷性知覚過敏症が再発するらしいと述べた後、マサチューセッツ州のクラーク大学から招聘状がきたことに触れる。我々が扱っている対象から誹謗中傷されても、我々の職業の宿命だと述べる。ユング（135J, 1909年３月11日）は寛容な言葉に感謝し、フリースのような事は起こらないと告げる。1909年３月25日ユング夫妻はウィーンを再訪問し、ユング（138J, 1909年４月２-12日）は、私の心霊論があっけらかんと実現したと書く。フロイトとユングが予知とパラ心理学について語り合い、フロイトが問題全体の核心を無意味だと退けたとき本箱のなかで破裂音が起こった。この一

件は、フロイト（139F, 1909年４月16日）がユングを公式に長子として迎え入れ、自分の後継者として、併せて太子として正式に指名した日の夜に起きた。

ユングは1909年５月チューリッヒ近郊のキュスナッハに引越した。フロイト（143F, 1909年６月３日）は奇妙な手紙を受け取り、初めてシュピールラインの名前を知る。ユング（144J, 1909年６月４日）は、シュピールラインは例の患者であることを認め、次のように説明する。

「彼女はアムステルダム講演の発表用にまとめた女性です。私の精神分析上のテスト・ケースで、彼女については特別の感謝と愛情をもって覚えているのです。私が彼女の相談相手になるのを打ち切れば、彼女は直ちに再発するに違いないという事実をこれまでの体験から知っていました。私が会っている限りは常と変わらぬ信頼できる友情を捧げるのが道徳的責任だと思って我慢してきたのですが、それが仇となったのか予期せぬ歯車が回り始めたのを知ったため、やむなく関係を断ったのです。彼女は私を誘惑する計画をこれまで企ててきましたが、それは私にとって不都合なものでした。今や彼女は復讐しか念頭にない状況です。ごく最近、彼女は私が早晩妻と離婚して、ある女子学生と再婚し、私の同僚を少なからず狼狽させるに違いないという風説をまき散らしていました。現在彼女が何を計画中であるのか、私には見当つきかねます。万一あなたに調停の役をふりあてようとしているのであれば、相手にされない方がよろしいかと存じます。彼女は父争いの症例に属していて、私は無駄を承知で治療をしようとして筆舌に尽くしがたい忍耐を払って無報酬にて、当の目的のため友情すらも乱用してしまったのです。」

フロイト（145F, 1909年６月７日）は、シュピールラインに空とぼけた手紙を書き、彼女の提案は度外れな狂信者の提案のごとく思われる旨をしたためたと返事をする。その直後、フロイト（147F, 1909年６月18日）はシュピールラインから２度目の手紙をもらったと述べる。ユング（148J, 1909年６月21日）は、「彼女がわが家に姿を現し、きわめてまともに話し合った結果、風説が彼女からでたものではないことが分かった」と報告し、次のように打ち明ける。

「私は本気になって彼女と子どもの問題を論じたものでした。私はうかつにも理論問題として話をすすめていると思い込んでいたのですが、不知不識のうちにエロスがその背景にしのびこんできたのです。こうして私は思いもよらなかった他の願望や期待の一切を患者の責任として押しつけてしまったのです。このような経過をたどって情況がきわめて緊迫してきて、もはや関係を持続する忍耐が性行為によってしか解決をみない事態があきらかになったとき、私は道徳に照らし合わせて、自己弁護する余地のない方法で自己防御を試みてしまったのです。自分の患者の性的策略の犠牲者にすぎなかったのだという妄想にとらわれた私は彼女の母親に手紙を書いたのです。私は娘の性欲をかなえてやる人間ではなく、一介の医師にすぎない事実、当の患者から私を解放する義務が母親にある事実を申し送ったのでした。患者は私の友人であり、私の信頼を十分に受けていた事実に照らして、私の行為は恐怖にかられて犯した一種の背信であったと、父親たるあなたに告白しないわけにはまいりません。」

フロイト（149F, 1909年６月30日）は、ユングに偏見を抱きすぎていたと述べる。シュピールラインから返信をもらい、その内容は驚くべきぎこちなさで、ドイツ人ではないと察したこと、彼女は極度に悲嘆にくれていて、真剣に思いつめていると指摘する。ユングには、この事件で問われるのはユングがとった行為ではなく、彼女の行為であると述べてユングを擁護する。

シュピールラインのフロイトへの手紙

シュピールラインのフロイトへの手紙をみると（Carotenuto, 1980）、彼女の最初の手紙（1909年５月30日）は短く、「先生にお目にかかることが許されれば、たいへんありがたく存じます」と述べ、自分を当地の病院で医局員をしていると紹介する。フロイト（1909年６月４日）は、「用

件が何なのか、まず文書で事の次第をお知らせください」と返す。ユングから説明を受けた後、フロイト（1909年６月８日）は彼女に「ユング博士との友情は治療行為から生じたのではないか、この友情がどのようにして壊れたのか、その責任はどちらにあるのか、私は判断したくない。だから外的な行動に出たり第三者を巻き込んだりせずに、自分の心の中で処理すべきではないか」と返事をする。この後彼女の手紙の下書きが、何日かにかけて書かれる。

６月10日付は「私がユング博士と仲直りするためにお手紙を差し上げたのだとお考えですか、私の最大の願いは彼を愛しつつ彼と別れることです、なぜなら私がユング博士に対する感情を抑制すれば、私はもはや誰とも愛することができなくなるでしょうから。私はユング博士をあなたの前で告発しようなどとは毛頭考えておりません、彼が愛に値する人間であり、決して卑劣漢ではないと、誰かが私に証明できるものなら、私はどんなに嬉しいでしょう。」と述べ、「私の恋人は、私を素材として最初の実験したこと、『くたばれジークフリート』とか『帰結（性的交渉）なしのキスは１回10フラン』などと侮辱したことに耐えてきた」と訴える。

６月11日付の内容は、「ユング博士は４年半前に私の医師になり、それから友人に、最後は『詩人』つまり恋人になりました。ついに彼は私のところに来て、事態は『詩（ポエジー）』の通常どおりに進みました。彼は一夫多妻を説き、妻も同意するだろうと言いました。私の母は匿名の手紙を受け取りました。それは流暢なドイツ語で書かれ、あなたの娘さんを救わなければならない、さもなければ彼女はユング博士によって破滅させられるだろうという内容で、誰がこの手紙を書いたのか、疑わしいのは彼の妻です。母が彼に友情の限界を越えないように懇願したのです。」というものである。母へのユング博士からの返答は以下のとおりである。

「私は自分の感情を背後に押し込めておくのをやめたとき、彼女の医師から友人になりました。私は職業上の義務を課せられていないと感じていましたので、なおさら容易に医師としての自分の役割を捨てることができたのです。というのも私は一度も報酬を請求したことがないからです。報酬こそ医師に課される限界を明確に規定するものです。男と女が友人として、そしてそれ以上の帰結を引き出す可能性がまったくなしに、いつまでも親しい交際を続けていくなどできるものではありません。他方、医師と患者は、いかに長い間であれ、いかに親密な事柄についても話し合いを続けることができます。患者は自分が必要とするあらゆる愛情と配慮を医師に求めることができますし、その権利があります。しかし医師は自分の限界を知っており、決してそれを越えないでしょう。というのは、彼は自らの労苦に対して支払いを受けているからです。あなたが私に医師としての立場に徹することを望まれるのなら、私の労苦に対する適切な謝礼として報酬をお支払いください。なお私の料金は診察１回につき10フランです。」この手紙が私の母にとってどれほど侮辱的であったか、ユング博士が個人的に患者をとる権利をもっていることを知らなかったので、お金の代わりに贈物を送っていたのです、と彼女は書いている。

６月13日付の内容は、次のようなものである。「１年半前から２年ほど前、親密な性愛的関係が問題になっていなかった頃、ユング博士とワーグナーについて語りあったのに、母が介入してから彼は情けない臆病者のように逃げ出しました。当地に来たばかりの頃、自分がブルクヘルツリの患者であることは隠さなかった。でも自分がユング博士を知っていて、彼に強い影響を与えたなどとは誰にも云わなかった。彼を無欲の心で愛したかったから。私はフロイト教授宛の1905年９月25日付の手紙をもっています［この日付は誤り］。その中でユング博士は当時19歳の私を『きわめて知的で才能があり、偉大な感受性をもった人物』と描写しています。私の目の前で彼は精神的に大きく成長しました。私は一歩一歩彼の発展の後を追うことができ、彼から本当に多くを学びました。彼は私に自分の最初の論文『連想における反応時間について』を与えて研究させ、私たちはずいぶん議論しました。そして彼は私に『このような頭脳が学問を前進させるのだ。

君は精神科医になるべきだよ』と言いました。屈辱を受けた自分を母や女友達に見られるのも耐え難いことなので、フロイト教授に手紙を書きたいと思ったのです。」

フロイト（1909年６月24日）はシュピールラインに、過ちが女性ではなく男性にあったということを認め、「あなたが葛藤に解決された高貴なやり方に、私が全面的に共感していることを、どうかご承知おきください」と返事する。

４．クラーク大学建学20周年記念式典（1909年９月）

アメリカのクラーク大学の建学20周年記念式典にスタンリー・ホールから招かれ、1909年８月20日フロイト、ユング、フェレンツィの３名はブレーメンで落ちあい、ニューヨークでブリルとジョーンズと合流して、マサチューセッツ州に向かった。フロイトは「精神分析について」を５回、ユングは「連想実験について」３回、両人ともドイツ語で話した。名誉博士号がフロイトは心理学に関して、ユングは教育学と社会衛生学に関して贈られた。

ユングは『自伝』で、1909年はフロイトとの関係で決定的であったという。ユングが、ブレーメンでは先史時代の人間が「泥炭地の死体」としてよく発見されることを話したところ、フロイトが発作を起こした。フロイトはユングが死の願望をもっていると確信したのだという。アメリカの旅は７週間続き、互いの夢を分析した。フロイトに私生活の情報を求めると、彼は「私は自分の権威を危うくすることはできない」と言って拒否した。その瞬間彼は権威を失ったとユングはいう。フロイトがユングの夢を不完全にしか解釈できなかった夢とは次のとおりである。

「私は自分の知らない家の中にいたが、それは２階建てで、『私の家』だった。私は２階にいたがそこはロココ様式の家具が備わった広間があり、壁にきれいな古い絵がかかっていた。この家が私の家だろうか、『悪くないな』と思った。そのとき階下どうなっているのか知らないことに気づいて、階段を降りて１階へつくと、もっと古いものが揃っていて、私は家のこの部分はほぼ15、16世紀ごろの時代のものと悟った。家具は中世風、床は赤い煉瓦張りで、少し暗かった。私は『さて、本当に家中を調べてまわらなくちゃならない』と思いながら、１部屋ずつみてまわった。重いドアに行き当たり、開けてみると地下室に通じる石の階段を見つけた。ふたたび降りていくと、私はずいぶん昔のものと思われる丸天井の部屋にいた。壁を調べているうちに、ふつうの石塊の間の煉瓦積みの個所と、モルタルの中のかけらを見つけ、私は壁がローマ時代のものと了解した。私の興味は強烈になり、床をもっと綿密に調べると、石板でできていて、そのうちの一つに輪のあるものを見つけた。それを引っ張ると、またもや深い所に降りていく狭い石の梯子段がみえた。私は降りて行って、岩に彫り込まれた低い洞穴へ入って行った。床にはひどい埃がたまっていて、屑の中に原始時代の名残のように、ばらばらになった骨や陶器類が散らばっていた。私は明らかに非常に古くこわれかけた人間の頭蓋骨を２つ見つけた。」

フロイトが興味をもったのは、２つの頭蓋骨で、秘密の死の願望が夢の中に隠されていると解釈した。ユングはこれに激しい抵抗を感じたが、「私の妻と義妹のです」と誰かの名前をあげなければならなかった。ユングによれば、これは集合的内容を伴う夢であり、多くの象徴的材料を含み、「集合的無意識」の概念へ導く『リビドーの変容と象徴』への前奏曲になった。

５．第２回国際精神分析会議（ニュルンベルグ）（1910年３月）

第２回国際精神分析会議が1910年３月30～31日ニュルンベルクで開催され、フロイト（53歳）は「精神分析療法の今後の可能性」を報告した。ここで国際精神分析学協会が創立されユング（34歳）が会長になり、ウィーン派とチューリッヒ派の対立が鮮明化していく。フロイト（185F, 1910年４月12日）は妥協案として、ウィーン精神分析学協会の代表を退き、後継者にアドラーを指名

し、アドラーとシュテーケルの共同編集による新しい月刊雑誌『精神分析学中央雑誌』を提案した。ユング（198J, 1910年６月17日）はブロイラーと決裂したと述べる。1910年12月フロイトとブロイラーはミュンヘンで私的関係を結び、ブロイラーはチューリッヒの精神分析支部に加入することになった。フロイトは、エディプス・コンプレックスや幼児性欲を放棄したアドラー説が普及するのを恐れた。1911年２月アドラーはウィーン精神分析協会の会長を辞めた。フロイト（260F, 1911年６月15日）はアドラーを厄介払いしたと述べ、アドラーは『中央誌』の編集から離れ、協会からも脱退し、個人心理学を創始することになった。

フロイトは１人で1911年９月16日から、キュスナッハのユングの家に３日間滞在した。引き続き第３回国際精神分析会議が1911年９月21～22日ワイマールで行われ、フロイトは「シュレーバー分析」を報告した。ユングは会長に再選され、「象徴的表現についての考察」を報告した。フロイトとユングの関係について、ユングの妻エマ（1911年10月30日）がフロイトに次のような手紙を書く。「先生と夫のとの間がこれまでとは全然違うものになっているとの思いに悩まされ、今のようであってはいけないと思い知らされましたので、私の力の及ぶ限りであれば何でもしなくてはならないと考えました。どういうわけでしょうか、先生が『リビドーの変容』に賛成されていないと考えるのが、私の思い違いなのかどうか測りかねております。」

エマ（1911年11月６日）は次のような手紙もフロイトに書く。「先生がカールに寄せてくださるご信頼を私どもがどんなに嬉しく思い、名誉に思っているかご想像いただけるかと存じます。でも先生はカールを信頼しすぎているのではないかと思いたくなる折が私にはございます。先生が必要となさるよりもっと立派な継承者と完成者を、彼のうちにみられているのではないでしょうか。なぜ先生は今、ご自分で勝ち取ったご名声とご成功を享受なさらないで、譲り渡そうとなさっているのでしょうか。」

ユング（282J, 1911年11月14日）は、「リビドーの変容と象徴」第２部で、リビドーの抜本的検討に取りかかっているところで、リビドー論を早発性痴呆に応用可能にする発生的契機によって拡大される必要があります」と述べる。シュピールラインの学位論文は『年報』に掲載する価値があると書く。ユング（287J, 1911年12月１日）は、ブロイラーのチューリッヒ支部からの脱会に触れた後、1912年度版『年報』にシュピールラインの新しい論文「生成の原因としての破壊」を掲載するつもりであると報告する。シュレーバー分析をみても早発性痴呆における現実機能の喪失はリビドーの抑圧では還元できないと述べる。

フロイト（301F, 1912年２月29日）はユングが研究に打ち込むあまり、組織が機能していないと苦情を述べると、ユング（303J, 1912年３月３日）は自立したいという訴えをニーチェのツァラトゥストラに代弁させる。「いつまでもたんなる弟子にとどまっているのは、師によく報いるゆえんでない。してきみたちは、なぜわたしの月桂冠をむしり取ろうとしないのか。きみたちはわたしを崇拝する。だがきみたちの崇拝がいつの日かくつがえったとしたらどうだろう。〔倒れかかってくる〕神像に打ち砕かれないよう、用心せよ。」フロイト（311F, 1912年４月21日）はユングの「独立宣言」がリビドー論第２部に関係しているとみて、拝見したいと述べる。エマ（1912年９月10日）は「変容と象徴」第２部の抜き刷りをフロイトに送った。

1912年11月ミュンヘン代表者会議が開かれ、フロイトとユングは「クロイツリンゲンの態度」を論じあった。これは1912年４月ビンスワンガーがクロイツリンゲンにある精神病院の院長になったばかりの時、悪性腫瘍の手術を受け、フロイトが見舞いに駆けつけたが、ビンスワンガーが内緒にしてくれということで、ユングの家に立ち寄らなかったことをさす（Gay, 1988）。ユングが誤解を認めたが、フロイトが最近のスイス人の発表がフロイトを言及することが少なくなったと非難し始めたところ、フロイトは失神した。フロイト（329F, 1912年11月29日）はブレーメ

ンでの発作についてもふれ、微量の神経症を本気になって精査しなければなりませんと述べる。ユング（330J、1912年12月３日）は、「あなたの『微量の神経症』が私の研究をほとんど評価されないばかりか、多分に過小評価されています。自己中心的な権力衝動をもって他を貶めるウィーン風の規範を使用なさろうと思わないでください、さもないと父親コンプレックスの領域から、どんな他の中傷がでてくるかわかりません」と書く。

これ以降、フロイトはユングを「親愛なるドクトル」（Lieber Herr Doktor）と呼ぶ。フロイト（342F, 1913年１月３日）はわれわれの私的関係を全面的に放棄するように提案し、ユング（344J, 1913年１月６日）はフロイトの申し出を受け入れた。1913年８月ユングはロンドンの講演で新しい人間心理についての学問を「分析心理学」と名づけた。夢における抑圧された願望の解釈については、アドラーと完全に一致する意志から出る傾向を認めた。フロイトの神経症説との相違について、精神分析理論は純粋な性的見地から解放されるべきで、代わりにエネルギーの視点を導入したいと説明した。

1913年９月７～８日にミュンヘンで国際精神分析会議が開かれ、国際的な精神分析運動が分裂する。ユング（357J, 1913年10月27日）は『年報』の編集権を放棄した。フロイトが『年報』を継続し、1914年に「精神分析運動史」と「ナルシシズム入門」が掲載され、アブラハムが編集を担当した。ユング（358J, 1914年４月20日）は会長を辞任し、1914年４月フロイトは仮の会長にアブラハムを推薦した。1914年７月10日チューリッヒ支部の15名は国際精神分析学協会から脱会した。

ザビーナ・シュピールラインのその後

1910年シュピールラインはブロイラー教授に医学博士論文「早発性痴呆症（統合失調症）の一症例の心理学的内容について」を提出し、同年12月筆記試験、1911年１月口頭試問に合格し、３月にチューリッヒから転居した。1911年８月彼女は新しい論文「生成の原因としての破壊」を完成させた（Carotenuto, 1980）。彼女は論文の冒頭で、ユングの「リビドーの変容と象徴」から、「情熱的な願望としてのリビドーは２つの面がある。リビドーはあらゆるものを和解するが、他方で状況次第であらゆるものを破壊する力でもある」という文章を引用する。ユングによる死の観念は性の観念と対立するが、彼女の考えでは、生殖への衝動そのものが内部に矛盾を抱えながら成立している。彼女は自分の仮説を検証するために、ニーチェや神話の中に生と死をみていく。この論文はユングへの贈り物であり、彼からの卒業論文でもあろう。

シュピールラインは1911年10月より1912年４月までウィーンに住み、博士論文によってウィーン精神分析協会の会員として認められた。彼女の新しい論文の第３章「神話における生と死」の発表ついて、フロイト（286F, 1911年11月30日）はユングに「私は神話を扱うあなたの方法に対する若干の疑義を思いつき、それをこの若い女性の討議にもちだしました。それにしても彼女は大変感じがよく、私はそのように理解し始めました」と書いている。

彼女の新しい論文は1912年９月の『年報』に掲載されることになった。1912年６月ユングが結婚した年齢になったザビーナは、故郷ロストフでパーヴェル・シェフテルと結婚した。夫は５歳上、大学に入らず、医学を実践で学んで医師になった控えめなユダヤ人である。フロイト（1912年８月20日）は結婚した彼女に、「あなたはユングへの神経症的な依存から半ば癒されたということです、異民族の結合から救済者が誕生するというあなたの空想に対し、私はまったく共感を覚えませんでした」と書く（Carotenuto, 1980）。ザビーナはロシアで生活したくなく、アブラハムのいるベルリンに移ったが、夫はなかなか仕事を見つけることができなかった。彼女は1912年から1914年までベルリンにいて、児童分析の論文や報告を書き、1913年12月娘レナータを出産した。

この間精神分析運動は激しい内紛状態にあり、ザビーナは学問上の見解ではフロイト側にいたが、ユングとの個人的な関係を断絶する心の準備はできていなかった。1914年８月第一次世界大戦が勃発、1915年１月パーヴェルはロシアに旅立ち、ザビーナは娘とスイスのローザンヌに到着した。1917年11月から1918年１月にかけて、ザビーナからユング宛の手紙が残されている（Carotenuto, 1980）。ザビーナはユングとフロイトの見解が対立するものではないと主張したが、ユングからザビーナ宛の手紙は非公開である。

1920年９月、オランダで第６回国際精神分析会議が開かれ、彼女の他にメラニー・クラインやアンナ・フロイトが参加した。1921年ザビーナはジュネーブのルソー研究所に勤務し児童分析に関わった。この時、ジャン・ピアジェの教育分析を引き受けた。1922年３月母エヴァが亡くなり、ザビーナは日記や書簡をジュネーブの研究所に残して、1923年９月モスクワに移り、ロシア精神分析協会と国立精神分析研究所で働き始めた。パーヴェルはロストフの小児科診療所で医長として勤務し、夫を戦争で亡くした女性内科医オリガ・スニトコヴァと親しくなっていた。1926年６月ザビーナ（40歳）は２人目の女子を生み、母にちなんでエヴァと名づけた。1933年にソ連で精神分析は禁止になった。クレッチマーがナチスに抗議して一般医学精神療法学会の会長を辞任した後、1933年６月ユングが会長に就任した。1937年パーヴェルが心不全で亡くなる。1941年６月ドイツ空軍がロシア軍を爆撃した。娘レナータ（27歳）はこれ聞いてモスクワからザビーナ（55歳）、エヴァ（15歳）のいるロストフに向かった。1942年７月ドイツ軍がロストフを占領、ユダヤ系住民の大量虐殺が始まり、８月ザビーナ親子３人はその犠牲になった。

2002年10月ロストフ市はシュピールライン家があった通りに「精神分析家ザビーナ・シュピールライン」と刻まれた記念プレートを取りつけた。もし彼女がもっと生きていれば、クラインやアンナ・フロイトのように、児童分析のパイオニアとして認められたことであろう。

Ⅳ．考察

ここでフロイトとユングの訣別の原因と訣別の意味について、若干の考察を行う。

１．フロイトとユングの訣別にいたる関係の危機

1906年４月ユングがフロイトに接近した表の理由は、言語連想実験でフロイトのいう抑圧機制が解釈にきわめて重要だったからである。しかし精神病患者が示す心的内容にフロイトの夢解釈がどのように有用であるかがわからず、特に性欲説に納得がいかず、これは最後までユングの中でくすぶり続けた。ユングが接近した裏の理由は、1906年10月の書簡に現れ、ヒステリー症例である20歳ロシア人女子学生の扱い方に困っていたからである。この症例がシュピールラインで、1904年８月ブルクヘルツリに入院、1905年６月に退院してチューリッヒ大学医学部に入学した優秀な学生であった。ユングが彼女に連想実験に手伝わせるなどしている間に性愛的転移が生じた。二人は性的関係まで発展しスキャンダルとなり、ユングは1909年３月医長を辞め、同年５月キュスナッハに引越した。

ところが、この事件は訣別の直接の理由にならず、フロイトとユングは1909年９月のアメリカ講演旅行に出かけている。ユング（1962）は、この時の互いの夢解釈を訣別の理由にする。すなわち、フロイトはあくまでも自分の権威を守ろうとしたこと、夢の願望充足にこだわり象徴の集合的要素を理解できなかったことをあげるが、これは表の理由であろう。1909年３月の事件で、ユングは性欲動の強烈さをまざまざと思い知らされ、しかもフロイトにすべてを知られてしまった。アメリカへ行く前に、ユングのもう一つの人格（No２）が動き始め、「リビドーの変容と象

徴」の研究にスイッチが入ったと考える方が自然であろう。

1910年３月国際精神分析学協会が設立され、ユングが会長になり、1911年９月ワイマール会議で会長に再選された。しかしユングの妻エマは、二人の関係にひびが入っているのを感じ、1911年11月フロイトに、その理由がユングの「リビドーの変容と象徴」にあるのではないかと手紙に書く。ユングの「リビドーの変容と象徴」第２部が完成後、1912年11月のミュンヘン会議でフロイトはユングの眼前で失神する。フロイトの失神は、1909年９月のアメリカ講演旅行でも起きており、ユングとの関係の危機を象徴的に表現している。

1911年11月ユングの妻エヴァがフロイトに、カールを信頼しすぎているのではないか、なぜ勝ち取った名声を享受せずに譲り渡そうとするのか、という手紙も書いている。そこで、フロイト（1914）の「精神分析運動史」を検討する。フロイトは、「精神分析は私の創始したものであり、精神分析に従事して十年に及ぶのは私一人きりで、精神分析という名称を付するのにふさわしいものであるとか、これは別の名称で呼ぶべきであるということを心得ている点にかけて、私の右にでるものはないと主張するのは当然である」と述べる。これまで性欲説がさまざまに抵抗に出会ったが、小さなサークル（水曜会）が1902年から始まり、国際精神分析学協会が創設されるに至った。そこでフロイトは「精神分析の運動を組織化し、本拠地をチューリッヒに移転し、この運動の領袖をすえ、この領袖に精神分析運動の行く末を見守ってもらいたいと考えた。この運動にとって、癌は私という人物である。私に毀誉褒貶が余りにも入り乱れているので、精神分析発祥地と同様に第一線から退こうと思った。ブロイラーとは同年輩なので、後継にユングの他にありえず、彼は人種偏見を私のために捨て去ろうとしているように見えた」という。

フロイトは、精神分析の歴史を「運動史」とみるほどに英雄願望は強大で、精神分析を非ユダヤ系の民族にも広めようとしていたということがわかる。

２．フロイトのユング批判

フロイト（1914）は、「精神分析は神経症の解明こそが一番の急務であり、抵抗と転移という２つの事実を出発点とし、健忘という第３の事実を顧慮しつつ、抑圧の理論、神経症の性欲動の理論、無意識の理論を正当性として認めてきた」と明示する。「アドラーの場合、器官劣等生の研究には無意識という評価が欠け、『男性的抗議』では攻撃欲動を重視して愛のでるまくはない。アドラー理論は完全に間違っているが、欲動理論に基づいている。ユングは諸現象と欲動との結びつきをぐらつかせ、その修正は不明確、不明晰、混沌とし、謎めいている。アドラーが以前に社会学を学び、ユングは神学を学んでいた事が影響したのであろう」と、フロイトは批判する。

土居（1994）はフロイトとユングの往復書簡について、「フロイトはフリースのときと同じように、同性愛感情、その中身は『甘え』ときわめて近いものがあり、ユングにも多分に存したとみている。二人とも一種のグノーシス派的心情（自己認識による救済）を抱いていたが、ユングの方が象徴の探究に凝ってしまい、フロイトの方がユングより客観的事実性に重きを置いている。だから、フロイトの系譜からはその後に種々の流派が生まれたのに、ユングの系譜にはそのような発展がないのであろう」と指摘する。この点でフロイトの方が修正する余地があり、1921年「死の本能」を提唱し、欲動論を修正している。

３．訣別後のユング

1913年１月フロイトとユングの私的関係は解消され、９月国際的な精神分析運動が分裂した。ユング（1962）はフロイトと訣別後、内的不確実感、方向喪失感に襲われ、自分の生涯を調べて「無意識との対決」に取り組む。彼は「リビドーの変容と象徴」を完成後の３年間は本を読めな

かったが、暗黒の中から脱出し始めたのは第１次世界大戦の終わり頃で、これに役立ったのは、「あの女性との関係を断ったこと、曼荼羅図形を理解し始めたこと」をあげる。

ユング（1962）は自分と未開人がジークフリートを撃った夢（1913年12月18日）を語り、「私はあたかも自分自身が撃たれたかのように、圧倒的な憐れみを感じた。これは私とジークフリートとの密やか同一視の徴しでもあった。この同一視と私の英雄的な理想主義は棄て去らねばならなかった」と述べる。「ひとりの女性が私の心の中から、私と衝突するという事実に大いに興味をそそられ、彼女は原始的な意味における『魂』である、というのが私の結論であった」と述べ、この魂に「アニマ」という呼び名を与えた。ユングは「アニマの狡猾さは一人の男を完全につぶしてしまうことができる」と否定的な面を述べるが、肯定的な面も付け加える。

土居（1993）は「ユングは牧師の息子として濃厚なキリスト教的雰囲気の中で育っているが、早くからキリスト教に背を向け、そうであればこそ、初め情熱的にフロイトの思想に共鳴したと思われる。フロイトはまさに彼の精神的父親となっていたわけだ。それだけにフロイトとの訣別後は、まるで大海原に漂いだすような感慨を催したに違いない。ユングの心理学で興味深いのは、彼個人にとって重要であったはずの罪悪感がまったく考慮されていないことである。フロイドは罪悪感をエディプス・コンプレックスの中に入れて処理した」と述べる。

この指摘にユング心理学の特質が現れているであろう。ユングはフロイトとの訣別によって初めてシュピールラインの「生成の原因としての破壊」に向きあい、そして彼が長い間求めていた精神病的な死の世界に触れ、そこからキリスト教に頼ることなく再生する道を模索したのだと思われる。ユングを導いたシュピールラインは「アニマ」の原形になったと考えられる。

Ⅴ．おわりに

フロイトとユングの往復書簡は、臨床心理学の新しい理論がどういう過程で生まれてくるのかを見せてくれる。エレンベルガー（Ellenberger, 1970）は力動精神医学発達史を研究する中で、学派の創始者が原始治療者と同じように「入門の病」を経験することを見つけ、これは精神病でないので「創造の病」（creative illness）と名づけた。これはある観念に激しく没頭し、真理を求める時期に続いておこり、これを経過した人物は新しいヴィジョンをひっさげて登場する。

フロイトの場合、1894年から1900年に至る、フリースとの関係が「創造の病」の期間にあたる。フロイトは1895年にヨゼフ・ブロイアー（Josef Breuer, 1842−1925）と『ヒステリー研究』を出版するが、その前の1894年夏に彼との学問的関係が終わる。フロイトはブロイアーを介してフリースと知り合い、その関係は『夢判断』が刊行された1900年まで続いた。フロイトのフリース宛の手紙が284通が残存する。1896年フロイトの父がなくなり、フリースを相手に自己分析が行われ、1897年エディプス・コンプレックスが発見された（中野, 2012）。

ユングの創造の病は、フロイトと訣別した1913年から始まり、夢におどろおどろしい元型たちがむき出しの姿を現した。この時ユングは無意識からくるイメージを吟味して、可能な限り意識の言葉に翻訳した。ユングはこれと同じことをした人がニーチェだと確信している。1916年に死せる魂に出会い『死者への七つの語らい』を出版し、第一次世界大戦の終わり頃、個別化過程における決定的進展の徴として「曼荼羅」を発見して、1919年初めに実験が終わった。

創造の病は完全に消えることはなく、「微量の神経症」がフロイトにフリースのときと同じようにユングの眼前で失神発作を起こした。ユングの場合、シュピールラインにみせた一夫多妻傾向はアントニア（トニー）・ヴォルフ（1888−1953）をアニマとしエマを苦しめた。トニーは1910年ユングの患者になり、ユングは1911年９月ワイマール会議に妻と共に彼女を連れて参加した

（269J, 1911年８月29日）。トニーは40年にわたってユングの親密な共同研究者であった。二人の関係が医師・患者関係を越えたのは1913年である可能性が高い（Anthony, 1990）。

理論の創造には、特別な人以外すべての利害関係と訣別し「参籠」（incubation）に入って自分に修練を課す必要があり、この時編み出された方法が治療法になる（Ellenberger, 1970）。フロイトの方法は「自由連想法」であり、ユングは「能動的想像法」と夢の描画であった。

文献

１）Anthony, M.（1990）. *The Valkyries. The Women Around C.G.Jung.* Element Books, Shaftebury, Dorset. 宮島麿（訳）（1995）：ユングをめぐる女性たち．青土社.

２）Carotenuto, A.（1980）. *Diario Di Una Segreta Simmetria. Sabina Spielrein tra Jung e Freud.* Astrolabio, Roma. 入江良平・村本詔司・小川捷之（訳）（1991）；秘密のシンメトリー．みすず書房.

３）土居健郎（1993）．指定討論．日本病跡学雑誌，46, 45–47.

４）土居健郎（1994）．フロイドとユング．Psyche，13（土居健郎選集3―精神分析について．岩波書店 pp262–266.）

５）Ellenberger, H.,（1970）. *The Discovery of the Unconscious. The History and Evolution of Dynamic Psychiatry.* Basic Books, New York. 木村敏・中井久夫監訳（1980）：無意識の発見　力動的精神医学発達史（上・下）．弘文堂.

６）Freud S（1914）. *On the History of the Psychoanalytic Movement.* Standard Edition Vol. 14. trans. StracheyJ, London: Hogarth Press, pp１–66, 1957. 高橋義孝・生松敬三他訳（1983）：精神分析運動史．フロイト著作集10　人文書院 pp255–310.

７）Freud, S.（1954）. *The Origins of Psycho-Analysis: Letters to Wilhelm Fliess.* Basic Books, New York.

８）Freud, S. & Jung, C.G.（1974）. *The Freud / Jung Letters: The Correspondence between SIGMUND FREUD and CARL GUSTAV JUNG.* ed. William McGuire. Princeton University Press, New Jersey. 平田武靖（訳）（1979, 1987）：フロイト／ユング往復書簡集（上、下）．誠信書房.

９）Gay P（1988）. *Freud. A Life for Our Time.* New York: W.W.Norton. 鈴木晶訳（1997, 2004）：フロイト1, 2. みすず書房

10）林道義（1998）．図説ユング　自己実現と救いの心理学．新河出書房新社.

11）Jung, C.G.（1905–1934）．林道義（訳）（1993）：連想実験．みすず書房.

12）Jung, C.G.（1907）. *Über die Psychologie der Dementia praecox. Ein Versuch*．安田一郎（訳）（2003）：分裂病の心理．青土社.

13）Jung, C. G.（1962）. *Memories, Dreams, Reflections*. *"Erinnerungen Träume Gedanken"* recorded and edited by Aniela Jaffé. Pantheon Books, New York. 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子（訳）（1972, 1973）：ユング自伝１, 2.―思い出・夢・思想―．みすず書房.

14）中野明徳（2012）．S.フロイトの夢判断―自己分析が生み出したもの．福島大学総合教育研究センター紀要，12，１–10.

15）中野明徳（2021）．アンナ・フロイトの児童分析と自我心理学―父フロイトから受け継いだもの．別府大学大学院紀要，23, 17–36.

16）Richebächer, S.（2005）. *Sabina Spielrein. Eine fast grausame Liebe zur Wissenschaft.* Dörlemann Verlag AG, Zürich. 田中ひかる（訳）（2009）：ザビーナ・シュピールラインの悲劇．岩波書店.